

松山幸生先生講述

全32回--19

2023年02月

写者

小原靖夫

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

第19回 聖なるものへの畏怖・畏敬の勧告

第10章⑱節~㉕節 奨励と勧告

- ⑱それで、兄弟たち、私たちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。
- ⑳イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道を私たちのために開いてくださったのです。
- ㉑更に、私たちには神の家を支配する偉大な大祭司がおられるのですから、
- ㉒心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか。
- ㉓約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう。
- ㉔互いに愛と善行に励むように心がけ、
- ㉕ある人たちの習慣に倣って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合いましょう。かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから、ますます励まし合おうではありませんか。

大変暑い残暑の中で、私たちはこの8月という季節を過ごしています。特に8月の6日、9日、15日という、私たちの国にとって大きな出来事のあった3日間、じっくりとその戦争の中で起こった出来事をもう一度考え直し、見つめ直し、にれはむ（反芻する）機会が今年も与えられました。

今月のこのヘブライ人への手紙の10章の⑱節から後の部分は、「贖罪論」又は「キリスト大祭司論」を終えて次の第11章からの実践に移っていく準備（ブリッジ）のために新しい勧告をしているところで、小見出しが「奨励と勧告」という言葉になっています。²⁰⁶

もしも、この部分が欠落して、10章の⑱節から直ちに11章につながると、ものすごいギャップを感じるほど大きな論旨の飛躍があるのです。

贖い主、大祭司でいらっしゃるイエス・キリスト、私たちはこの御方に頼る以外に救われる道はないのだということを色々な角度から説き明かされて来ました。著者は、「そういう大きな根底に支えられた上で、私たちの今があり、かの日（終わりの日）があり、歩みが方向付けられているのです」と言おうとしています。

私が小学生だった頃、よく学校で皆と楽しんだ遊びに、砂鉄を下敷きの上に乗せて下から磁石を当てて動かし、そこに文字を書いたり、それでお人形を作って相撲を取らせたりしたことがありました。下から磁石を当てると、漠然と散らばっていた砂がその磁石に引き寄せられて一つの形を作って固まりになってゆく。それなら上から磁石をかざすとどうなるか。砂鉄は飛び上がって磁石に吸いついてしまい、下敷きの上には何も残っていません。

これを「信仰」にあてはめて、下敷きの上に留まらないで、かざした磁石に引き上げられるということが「信仰」なのではないかと考える、案外、そういう発想の信仰理解が大半なのではないかと思うのです。

現実のことはもうどうでもいい、信仰がありさえすれば、と言っている場合は、たいてい「磁石は上にあって私を吸いつけてくれればいい、そうすれば、私はもうこの下敷きとは縁がなくなるのだ」という発想でものを見ている。そういう信仰理解というのは割り合い楽なのです。というのも、今日のことには責任がないからです。私の責任で起こっているわけではないからどうでもいいのだ、ということで片付けられますから案外楽なのです。

ところが、著者は、「そういう信仰では駄目なのだ、長い歴史の中で神が働きかけ続けてくださった、その働きをしっかり継承する今日でなければならぬのだから。その信仰をしっかり見つめて生きてゆきましょうと語っているのです。

それは、とりもなおさず、神に逆らい続けて来た人間の歴史をしっかりと踏まえて今日を生きる、ということですから相当重たいことなのです、だから皆、嫌なのです。

そんなことを忘れて生きていきたい人は、「信仰をもっているのに、何でそんな面倒臭いことを言われるのだ」つぶやくのです。

そのように、キリスト教という宗教が、ここ4、5年位でしょうか、だんだん様変わりをして来ているのです。それは、現状を否定することによって自己肯定をしていこうという方向にだんだん動いて来ていることです。「この世の中は悪くて滅びるのだから、わたしたちだけは救われるために聖められましょう」という格好で動き始めています。

言い換えると、私たちの信仰で祈っても何をしても、この世は、神からかけ離れたステージで事を為して、もう私たちの力は及ばなくなった。「だから、この世の中のことを考えるのをやめて神のことだけ考えましょう。この世のことに心を奪われしないで、神を静かに考えることが、即ち、私たちが聖められている証しなのですよ、」というような動きが少しずつ「キリスト教という宗教」の中に起こって来たのです。

私は今、「キリスト教という宗教」という言葉を心ならずも一所懸命用いていますが、私など「キリスト・イエスを信じている人間」には、この世と関わらないことができない。なぜなら、キリスト・イエスは嫌なことの多いこの暗い世の中に、わざわざ受肉して生まれて来られたからです。

言い換えると、イエスはこの世のこととの関わりを捨ててはいけなとお示しになったのです。にっちもさっちもいかない、もうどうにもならないのに、神の言葉を全く聴こうとしないこの世に、イエスは人となっておいでくださった。そのイエスを信じるのですからこの世のことなどどうでもいいなどとは言えないのです。むしろ、この世のことが気になって仕方がない。そういう御方がイエスなのです。209

何が気になられたかと言うと、この世の諸制度や歪みの中で吹き飛ばされている人間が自分の権利の主張さえもできない社会の中で、無力感、虚無感に苛まれている人々、その人々のところに出かけて行って、「あなたは神様から疎外されていないんだ、無視されていないんだよ」とはっきり伝える。そのことが目的でこの世においでになり、そのように歩まれた、それがキリスト・イエスの御生涯なのです。

だから、イエスをキリストと信じる人間は、イエスと一緒に生きることなしにはキリストを信じているとは言えないわけです。その意味で「キリスト教を信じている人間」と「キリストを信じている人間」とは段々はっきりと区分けされ続けていくのではないかと思うのです。

一方、ヘブライ人への手紙を受け取った当時の教会の人々はそのどちらでもなく、大迫害に遭ったけれども、やがて緩和期が来て、ああよかったなと心を緩めていたら今度は何となくこの世のことが慕わしくなり、皆と一緒にうまくやって行けないかなと考えるようになった。

その結果、またイエスを信じる信仰に少しねじれ現象が起こって来て、信仰がおかしくなってきた。そういう教会に向けて、このヘブライ人への手紙は書かれているわけです。

「そのような生ぬるい生き方をしていると、あなたがたの信仰は、またもみ殻のように吹き飛ばされ、ふるいにかけて御神の前に問われますよ」、と著者は言わんとしていますから、相当きついことが書いてあります。

滅びる者になるとか、捨てられるとか、あなたがたの身に及びますとか、書いてあるわけです。それが「やはり、イエスをキリストと信じる現実なのだろう」と思います。

「イエスに従ってイエスのように生きるのか、または、イエスのように生きるのは嫌だからもっとましな生き方をしたいのか、どちらを選びますか」、ということが著者の最後の「勧告」の部分で取り上げられています。

でも、「奨励と勧告」なんて書いてあるから、何となく勇気百倍、元気が出るかなと思って読んで行くと、案外そうでもない。この著者はご承知のように、イエス・キリストが成してくださった大きな恵みの業、贖いの業がどういうものだったのか、そしてなぜ、イエスがそのように贖わなければならなかったのかということを目にタコができるほど7章の①節から、10章の⑩節まで何度も何度も繰り返し繰り返し、方向を変え、言葉を変え、

角度を変えて語って来ました。ですから、今度は、そのように熱心に語って来たそのことの理由は何なのかを述べてゆくわけです

第⑨節

それで、兄弟たち、私たちは、イエスの血によって聖所に入れると確信しています。

著者にとって、信じる者の少ない、あるいは信用できる者がほとんどない歴史の現実の中で、これだけは確かだと彼は宣言するのです。それは、「イエスの血潮によって聖所に入れること」なのです。短い言葉ですが、すごいことを言っているのです。

と言うのは、旧約の時代には、聖所に入れるのは特別な人、特にここでは「至聖所」のことを言っているのですから、祭司の中で籤に当たり、その年の大祭司になった人だけが年に一度入れるという「すごい限定」がついているのです。そこ（霊的な至聖所）になんと！あなたが入れるのです。それは他でもない、「イエスが、あなたを贖ってくださったから」なのです。ここで言っている贖いの意味はそれ程絶大なものなのです。²¹³

そこで再び私は今日本の教会が歩んでいる歩み、キリスト者が歩んでいる歩みを見つめてみた時、色々な意味で、非常に恵まれた状況の中に生かされていながら「残念だなと思うことが二つあります」

一つは「聖なるものに対する畏れの念というのが余りない」こと。

別にプロテスタントの教会は会堂が大事だと考えたり、十字架のモニュメントが大切だと考えたりする宗教ではないのですが、少なくとも礼拝に連なる時、神の御前に引き出されるのだという峻厳な思いがだんだん欠落して来ているように思えるのです。

それで「今、私は特別な恵みによって神の御前に召し出され、特別に清められた場所に、特別な者として招待されているのだ、そしてそこに私は跪くことを許されているのだ」、ということが自分の心の中にしっかりと確立されないままで、礼拝が始まっているという状況が案外多いのではないのでしょうか。

私は、聖なるものに対する畏怖の念とか、畏敬の念が欠落してしまったところではイエス・キリストの贖いはほとんど意味を失っていると思います。イエスの贖いがなくても私は天国に行けるのだという・積極的にそのように思っている人は少ないでしょうけれども現実にはそういう認識が、その人の心を支配してしまっているような空気が教会の中にないのでしょうか。

残念だと思うことの二番目は、神に造られたものだと頭の中ではわかっているけれども、現実の中では神様に造られたものだという思いが自分のすべてを支配するまでに至っていないこと。その一番大きな証拠は「時間が神様のものだ」という発想から完全に逸脱して生活していることです。（被造物という謙虚さ）

裏返すとそれは「時間は自分のものだ」という独善です。もしも時間があなたのものになるのなら、すべてはあなたのものであり得るわけです。

そうして今や、神のものは皆私のものであった、だから神はありがたい。（私の物にならないとありがたくないわけです。）そんな信仰ならぬ罪があるから、あなたがたは、「イエスの血によって贖われることも、神のものにもならないし、聖所にも入れないのです」と著者は言うのです。

ところで、この第⑨節から先を読んで行きますとギリシャ語の「ピスティス」という言葉がいっぱい出て来ます。この「確信」という言葉もピスティス、「信じています」「真実」という言葉もピスティス、「信頼する」という言葉もピスティスなんです。それはどういうことかというと「イエス・キリストの真実はキリスト御自身によってすべてが支配されている。イエスの血が贖ってくださったことによってすべてが支配されている。皆そのことによって存在し続けている。在り続けることがゆるされているという確信です。だから、普段私たちが使っている「確信」とは随分意味が違うのです。「それなしにはすべてが存在に至っていないことを確信しています」という、その位の強い意味なのです。

イエスの血潮の贖いのゆえに「今」があり、生き、ゆるされて在る。そのことを抜きにしてはすべてのことは考えられないのが現実なのだ。空気のない世界に生きるなど考えられないと同じ位、確かなことなのだ。

第⑩節、

イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道を私たちのために開いてくださったのです。

今までは聖所にお入りになった大祭司キリストを語ってきたわけですが、⑩節は少し視点を変えて「イエスは垂れ幕」について語ります。²¹⁸

聖所と至聖所の間下げられていた幕、これは色々な説がありますが、二面の垂れ幕があつて、それが真ん中でダブるような形で下げられていたのだらうとも言われています。

「その垂れ幕の間を通して大祭司は神の御前に贖いを願い、年に一度贖罪の業をしていたのですが、イエスこそはその『垂れ幕』です」と言っているのです。

イエス=垂れ幕というのは、「神と人との間の仲立ちをする、その境目に置かれている御方、聖と俗との中間に位置を占める御方、創造物と被造物の間に場を占めておられる御方」、この御方を抜きにして、創造者、被造物ということは考えられないし、聖さと穢れを問題にすることもできない。イエスのことを考えて行く時の「基準」になると同時にその垂れ幕は「隔ての幕」であるということなのです。

ここで、「イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通して、新しい生きた道を私たちのために開いてくださったのです」と書かれているように、全く区別をする境目で一旦行き止まりにすると同時に、更にそこを通り抜けられるようにも道備えをもしてくださったのです。

即ち、イエスを通して聖めに入れられるように、垂れ幕なる御自分を裂いて私たちに明け渡してくださったのです。

「贖いの行為」が旧約の儀式的、祭儀的な手続きとして考えられたその事柄を、もう一つの新しい展開に変えて、イエスの贖いは「私たちと神を結ぶ道となってくださったこと」なのです。これは何も著者が突然思いついたことではありません。既に「ヨハネによる福音書」の中で「わたしは道であり、真理であり、命である」とイエスは言われています。イエスを通らなければ誰も神の国にゆけない。聖められない。神のものとはなれない。それは「新しい生きた道だ」と書いてあるのです。

言い換えると、それはかつてあった道ではなく、あなたのために切り開かれた道、命を得る道なのです。この道を歩いて行くことによって、初めて聖い者となるのです。

「垂れ幕がある」わけですから、私たちはそこで立ち止まる。この「立ち止まること」が、悔い改めを意味し、自ら聖められるように、畏れを覚えて神の御前に膝をかがめることを意味すると考えられます。

この「跪く習慣」は形の上でどうかということではないのですが、少なくとも聖公会の教会でもカトリックの教会でも皆同じですが、自分たちの席の前に、「跪くための小さな台」が用意されていて聖餐にあずかる時には皆そこに膝をついて陪餐をします。でも多くのプロテスタントの教会は、形式的なことは止めよう、心で跪けばよいと考えて跪くことが行われなような会堂建築になったのでしょうか。

そして、私たちはいつでも動ける状態に自分を置いて、非常に合理的、行動的になったのと引き換えに、神を静かに思うとか、永遠を思うとかという、静まることを礼拝の要素からは遠ざけているような在り方をしてはいないでしょうか。²²¹

私たちは聖いもの、聖められることに、今の時代だからこそもっと心を向けていかなければいけないと思います。

「聖めとは、別なものになること、区別されることですよ」と私は言うのです。キリストのために、キリストに向かって、区別されている存在としての『自分』というものが、本当に相応しくそうになっているかが問われるのが、主の御前に跪く時であり、頭を垂れる時ではないでしょうか。

第②節、

更に、私たちには神の家を支配する偉大な祭司がおられるのですから

「神の家」、（これは、かつては会堂であり神殿であったのでしょうか）この時代には、

教会=エクレシアと言われました。教会にはそれを御支配くださるイエス御自身がいらっしゃる。今、本当に教会が考えておかなければならない大事な問題は「教会の支配者はイエス・キリストなのだ」ということなのです。

新しい時代の教会が社会的存在として立ち続けるために、教会はこの世との関わりを無視できなくなり、その関係を保っていくために「教会政治」が行われるようになりました。今日の言葉で言えば「宗教法人法に基づく教会」というものが社会的には保護を受けて生存することが許されるような状況にあり、その法に教会が則って行くために、教会も、一つの政治形態を取らざるを得なくなったのです。²²³

例えば、長老主義とか会衆主義とか、監督主義とかいう形で出て来るわけです。これは勿論、信仰の産物であると同時にそれ以上にこの世における教会の対応の仕方の中で生まれて来たものなのです。

教会の支配者はイエス・キリストです。

だから、私たちは教会をイエス・キリストの教会と信じているのです。

ところが、だんだんそうでないと思う教会支配が始まって来ると、わざわざ教会が「キリストの教会」と言わなければならなくなる。「教会」という言葉の中に、キリストの御支配の中にある群れという意味があるのに、わざわざそう言わざるを得ないところに、教会が教会というところからずり落ち始める兆しがあるのです。

ともかく私たちは、まず、教会の所有者、時間の所有者、あるいはすべての事柄の所有者がイエスだという大きな建前からはみ出したところで生活を始めようとしている現実を直視しましょう。「それでは本当の救いはあなたのものになりません」という著者の声に耳を傾けましょう。

第②節、

心は清められて、良心のとがめはなくなり、体は清い水で洗われています。

信頼しきって、真心から神に近づこうではありませんか。

「心が清（聖）められる」とは、神の基準の前で咎め立てされる部分がなくなること、イエスのお助けによって神の御心に適わないことはしなくなることです。

ここでちょっと踏み込んで捉え直して見ると、

「私たちの行為は心が生み出している」と著者は言っています。行為にはそれを生み出す理由がある、土台がある。目に見える一つ一つは、目に見えないところから与えられる力によって生み出されて来ているのです。

例えば、一つの家が自家発電で生活しようと自家発電装置を作るとすれば、恐らくすっぽりワンフロア使わなければならない程大きな設備が必要になります。ただそのようなものが地上にあると邪魔だから、それは大概地下に埋めてしまう。見えないところで24時

間絶え間なく発電作業していれば上にある建物では支障なく生活できる。ところが発電装置が止まってしまったら、どんなに豪華なシャンデリアを付けていようと、立派な電化製品を置いていようと、全く機能しなくなってしまう。けれども、地下でそれが働いているから、そのお陰で生活ができているのだと普段から考えている人はほとんどいない。²²⁵

信仰生活も同じで、底支えしてくださる神の力、言い換えれば、神が聖めてくださる御霊の働きもオミットしてしまっています。表に見える形だけであの人の信仰は立派だとか、これだけのことをして来たとか言っていると、いつか知らぬ間に教会は本来の機能を失くなってゆく。

だから、そのような見えない問題を本気になって問題にし、心を向ける機会を作っていかなければならないのです。

心が聖められることによって、私たちは支障のない行動がとれるようになります。心が聖められるだけではなく、体も聖められる。

「体は聖い水で洗われています」と書いてあります。これは「洗礼を受けています」ということです。このことは「イエス・キリストが支配してくださることから生まれて来る事柄」なのですが、その事柄も「私」が決意して洗礼を受けたというような感覚で、当初は受け止められてしまうことが多いようです。

ですが、いつの日か「イエスの憐れみによって、私は導かれ、救われ、洗礼の恵みをいただきました。これは私の功しではなく主がくださった愛に他ならないのです。」という信仰告白を唱えるようになります。

また、私たちは自分は案外立派で良心的だと思いたくなります。そんな願望の成就をここで「心はキリストの御恵みによって洗い清められる」と言っています。「体はキリストの御恵みの水によって洗い清められる」ともと言っているのです。

その次の「信頼しきって」というのは、さっきのピスティスです。他の基準ではなく、他のことは一切ご破算にして、そのことにすべてをかけ、「真心から神に近づいてゆきましょう」と勧めています。²²⁷

ここを、ある聖書注解者が、「これは著者がヘブライ人を憐れみの心をもって覚えたために思わず言ってしまった言葉であって、このように私たちは言うことはできない」と言っています。それは、神に近づこうと思っても人間の側から近づけるはずはなく、神が近づいてくださるのだから、こんな風には言えないのだと。

しかし、そうではなくて、神によってあなたは神の方に行くように、これが遜（へりくだ）り造り変えられたのだから「さあ神の方に一緒に歩き出しましょう」と促しているのです。

言い換えると、今日からあなたが進む歩みはどの道も神に喜ばれる歩みになる、だからうつむいたり、かがんだりせず、「立ち上がって行きましょう」と呼びかけている。私たちの一挙手一投足、一言一句は神に近づく一歩一歩であるのですと著者は言っています。勿論、ここでの「神」はイエス・キリストによって示された神を言っているのですが、愛の神がお喜びになり、贖いの主が喜ばれるような「一歩を踏み出して行きましょう」と勧めているのです。

第②節、

約束してくださったのは真実な方なので、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう。

この「約束してくださったのは真実な方なので」というのは、そのように召してくださった御方はピステイスな御方、他に基準を持たない確かな御方なので、私たちはその御方に対してはっきりと信仰を言い表し、「揺るがぬ希望を保ちましょう」と言っているのです。²²⁸

この、はっきりと「公に言い表した希望」とは「信仰告白」です。

あなたが告白している信仰を、自分自身の大きな希望として揺るがない土台として生きてゆきましょう。ここで、著者は、教会が礼拝の中で行なっている要素を全部取り上げて語っています。「跪くこと、御声を聴くこと、敬虔になること、そしてイエスの前で礼拝すること、その御体と御血にあずかること、信仰の告白を礼拝を通して確かなものとして行くこと」等を語っているわけですから、これは正に当時の教会が行なっている礼拝の一つ一つの中にイエスの恵みによってこれが在り、為され、意味付けられていると言っていると思います。

「あなたがたの信仰告白」もまた御神の恵みによって与えられているから、そこに告白されている内容に希望をおいて生きて行きましょう。でもどの辺に希望をおくのでしょうか。少なくともこれは、「終わりの日に、再び来たり給う主を信じる信仰」に依っているのです。それをしっかり持ち続けましょう。そして主が行われる裁きにすべてを委ねて、今を希望に燃えて生きて行きましょうという「二重の希望」があるわけです。

現実が神によって造られ、支えられ、歩んでゆくことを、すべての人が受容したならば、私たちが唱える信仰告白は意味を失うのです。逆に尚も「私たちが信じている神は天地万物を造られた全能の神です」とこの世に向かって告白することは、この世はそう思っていないことを意味しているわけです。

だからこそ、それが告白され、「私たちは神の独り子イエス・キリストを信じます」と唱えることに希望をかけているのです。この告白一つ一つに希望と確信をもって今日を生きて行きましょう、そして、それを揺るがないようにしっかり保って行きましょうと勧めています。

第⑭節、

互いに愛と善行に励むように心がけ

これを、ある集会で話し合った時に「私たちは教会員ですから、お互いにそう振る舞うのは当たり前のことです。だから、そうしましょう」という結論になりそうになったのです。

そこで私は、「ヘブライ人への手紙が書かれた時代は教会員はマイノリティだったし、お互いにそのことのために、わざわざ『励まし合いましょう』と書いているんだから、『お互いにそうしましょう』と簡単に言うこととは違うんじゃないの、」と意地の悪いこと言ったのです。

そして私は、「いくらイエスが愛を注いで仕えても、良いことを行なってもちっともわかってくれない、感じてくれない、受け止めてくれない人々、そして最後には十字架に架けて殺してしまうような人々がいるからこそ、熱心に励み、イエスの愛を伝えてゆきましょう。私たちはそうしなければならないのですよ。」と説明しました。

更に、「それをわかってくれたら、励まなくてもいいのです。そういうことでこの手紙が書かれていると思うのです。だから、いわゆるヒューマンステックな言葉ではないのです。

血みどろな戦いなのです。だから『励む』という言葉が出て来るのです。『励む』ということは余程頑張らないと出て来ない言葉でしょ。お互いがわかり合い助け合っている時には励む必要はないのです。わからないからこそ励みましようと言っているわけです」と。

この手紙の時代から既に、教会は社会の中からは孤立した存在だったのです。

理解されない存在だったのです。その中で教会は何をやっても破れを経験していった。わかって貰えないというまどろこしさをいつも抱えていた。父なる神、子なるキリスト、創造の秩序を受け入れない人々に対して、私たちがどんなに愛を行なっても、通じない人には通じないのです。

立っている基盤が違うのですから、通じると思って愛するのではないのです。通じないことを承知しながらでも手を差し伸べて、支えなければ倒れてしまう、滅びてしまうことを考えた時じっとしていられなくなって、手を差し伸べたのがイエスでした。

福音書を読んでゆくとそういうことが沢山出て来ます。イエスに大勢の人が癒された。でもそのことを感謝讃美してイエスの後についていったのはわずかでした。その後のことは福音書は殆ど語っていない。それは一人でも救われるのは大切なことだからなのです。ですから、結果が大事なのではなく本当に愛をもって仕えること、良い行ないをもってこの世の人々に神の愛を伝えようとする、そのことが私たちがし続けなければならないことなのです。「頑張らなければいけないこと」なのですよと著者は言っています。²³¹

第⑮節

ある人たちの習慣に従って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合いましょう。

かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから、ますます励まし合おうではありませんか。

ここにも「ある人たちの習慣に倣って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合いましょ

う」と「励ます」ということが出て来ます。もうそんなことしている時代ではないとか、時代はもっと急を要しているのだから礼拝で祈ってなどいられないよと言って他のことに一所懸命になっている人もいるけれど、あなたがたは頑張っ

て誘惑に打ち勝ち礼拝を守りましょ

ここでは、礼拝を守ることに価値があるからとか何とか言っていないのです。イエスが命を捨てて愛してくださったのだから、あなたがたも頑張っ

てイエスを礼拝ましょ

う。すべての支配者であるイエスに倣うようにましょ

う。何があってもその御方から声を聴いてましょ

う。「励まし合

う」とはそのようなことです。

教会員が助け合い励まし合うのは何のためかといえば「自分たちのためではなく礼拝を本当に守り続けるため、この世の戦いに勝つためであり、この世の人に愛と善行をもって関わっていくため、聖められるため、お互いに励まし合っ

てゆきましょ

う」ということ

です。ですから、慰め合いましょ

うではなく、「励まし合いましょ

う」と書いてありま

す。

でも、そんなに頑張らないで皆と一緒に楽しくやりながら、イエスを紹介していっても良いと考える人々に対しては、そんな悠長なことを言っ

ていられない理由がありま

す。それは「かの日」、終わりの日が近づいているから

からです。

「今日の教会は神の御前での緊張感を欠落させている」と、私はよくそういう言葉を使うのですが、その一番大きな理由は、「再臨に対する恐れ」を持たないこと

です。主の日が近づいているという言葉に対して、本当に耳を傾け、そばだてて真剣になってその日の到来に心を向けていくことをしないから、呑気にのんびりしていら

れるのだと思

いま

す。

しかも、私たちは「再び来たり給う主を信ず」と告白しているのです。来てくださることはありがたいことなのですが、そのことを待っていなければいけ

ないのです。そのことに真剣になって暮らしているとすれば、悠長なことは言っ

ていられないだろ

うと思

いま

す。

そういう終末期における私たちの生様、信仰の在りようというものが、この⑱節から㉔節までの間では大分はっきりとした言葉でまとめられていま

す。「私が必死になってこの、『贖罪論』を語って来たのは、実はこんな背景があったからだ」と著者は言っ

ているので

す。

と同時に、イエスに贖われたということは、頭の中の問題や心の中の問題ではなく、今生きている「生様の問題」なのだ。そこに反映されてい

なかつたら何の意味も持たないのだと言っ

ているわけ

そういうわけで現実の生活の中で信仰はどうあるべきか、というのが第11章の中で出て来ます。先程の話に従えば、地下で作られている地下発電装置がきちんと作動することによって初めて、私たちの信仰が生きた形で作動してくるように、その信仰の深みの部分、見えない部分が確立されないで上っ面のことだけをいくら言っても、それは飾り物にしかならないのではないかと思います。

しっかり天に繋がって、イエス・キリストの命の息を吹き込まれて初めて、私たちがしようとしているすべてのことに意味が出て来る。そういう御方との繋がりが確立されていないところではそれは絵に描いた餅でしかないのだということになる。

そのような意味で今回の「ヘブライ人への手紙の勉強は『地下の部分』をずっと見てましたから、しんどかったと思うのですが、そういうところを一つのベースにして、そこから与えられる力に基づいて私たちの信仰生活が形成されてゆく過程が、これからどんな形で展開されて行くんだろうか、ということをして11章から後の部分で検討していこうと思います。

第11章から後は、見える部分が出てますから、前のところのようになぜなぜと考えないで済むところが沢山あると思いますが、その裏側にある今日お話したところは、短い接続の部分ではありますが、すごく重たいことを言っている箇所だということ覚えておいてください。

私たちはいつでも神の御前に生かされている恵みによって、どんな時にも動揺しないでいられる希望が与えられている。あるいはお互いに勧め合い励まし合って固く信仰に立ち、どんなことにも忍耐強く取り組んで行く力が与えられている。そして周りは信仰を受け入れてくれないのが当たり前なのだから、そんなことで絶望したり挫折したりしないで、忍耐強く頑張ろう。

やがては理解してくれると言う希望を持たないで、イエスは最後まで理解されないまま十字架につけられたけれども、それでもイエスは愛に生きたのだから、私たちもそういうイエスを見上げて生きてゆこう。「それは再びイエスがおいでになる日までのことですから」という言い方をして、この箇所は私たちに勧めの言葉を与えてくれています。そのような御言葉を聴きながら、更に神が与えてくださる御恵みを深く味わい生きて行く豊かさでキリストの命にあずかってゆく御恵みとを、畏れを覚えて歩む、これが私たちが秋の教会の伝道の闘いに立ち上がる時に、一番必要なことではないかと思います。

(1997年8月14日)

写者あとがき

私は、聖書を自分の都合のよいように読んでしまう傾向があります。この第10章⑩節から⑮節も「ああ、そうだなあ」と納得、一安心して読み飛ばしてしまいそうでした。しかし、松山幸生先生は、「そうではない」ここは「短い接続の部分であるが、すごく重たい箇所がこの手紙の「地下の部分」（見えないが全体を支えて存在を維持している）であると指摘され、7章①節から10

章⑱節まで繰り返し語ってきた内容（イエス・キリストが成してくださった大きな恵み、贖いの業がどのようなものだったのか、そしてそしてなぜイエスがそのように贖わなければならなかったのか）の理由を著者が述べていると指摘され、より丁寧に、より強く解説されています。

松山幸生先生独自の切り口で「キリスト・イエスを信じている人間」と「キリスト教という宗教を信じている人間」とに峻別され警告をされています。耳の痛いところを鋭く指摘され、私は何度も「ギク!」しました。私は深く反省し納得し受け入れ、悔い改めに導かれました。

又、松山幸生先生はこの世との関わりを大切にされ、戦争に向かう恐れのある政府に対しは、平和の祈りを公言され単独で色々な角度から抗議され続けて来られました。その信仰の強さ、深さが今回の講述で明らかになっていると思いました。なぜ、松山幸生先生が「この世と関わらないでいられなかったのか」それは「キリスト・イエスは嫌なことの多い暗い世に、しかも、イエスの言葉を全く聴こうとしないこの世に、わざわざ受肉して生まれて来られたからだ」と語っておられます。私は再度目が覚まされました。

イエス・キリストがこの世に来てくださった時の世界の様相と現代の様相はまさに酷似しているところがあります。イエスの御言に耳を傾けなかった歴史を経てきた年数だけ現代の容態は悪化していると言えます。核戦争の脅威、地球の温暖化による災害の具現、パンデミックの襲来はいずれも人間が作り出してしまったものです。その真っ只中にある「キリスト・イエスを信じている人間」はいかにあるべきかがこの箇所を通して語られています。

⑲節「確信」、⑳節「垂れ幕」、㉑節「神の家」、㉒節「心と体の聖め」、㉓節「希望」
㉔節「励む」、㉕節「励まし合う」に関し面々と説き明かしてくださり、私たち教会員が助け合い励まし合うのは何のためかといえば「自分たちのためではなく礼拝を本当に守り続けるため、この世との戦いに勝つためであり、この世の人に愛と善行をもって関わっていくため、聖められるため、お互いに励まし合ってゆきましよう」ということです。ですから、「慰め合いましよう」ではなく、「励まし合いましよう」と書いてあります。（本稿11頁再掲）そして、聖日礼拝の与り方について厳しいお言葉で私は反省を求められています。

繰り返しの言葉になりますが、この写書は、私の信仰を立て直すために神様がさせてくださっているのだという実感を益々持つようになりました。新しい教会での信仰生活も順調で、全てが整えられ、私は恵みの道を歩ませて頂いております。

森容子先生のご指導は、説教者の目線でまさに今日の前にいる私たちに語るようなりアリティがあります。今回は特に時間をかけて丁寧に松山先生の熱弁のお姿を思い浮かべながらの推敲をして頂きました。また原文におけるやむをえない割愛がありますが、それは苦悶の検討の末でございませう。先輩諸氏の皆様にはどうぞご理解頂きたくお願い申し上げます。2023年2月21日 小原記